

Trial & Error

No.305

November-December 2013



特集

JVC国際協力コンサート 25周年を機に変わること、変えないもの

写真上：2012年東京公演。150名超の合唱団員はすべてボランティアとして参加している。
写真下：このコンサートの創業者/実行委員長のアイネス・バスカビル。



JVC国際協力コンサート

25周年を機に変わることを、変えないもの

「現地の人を支えるJVCの活動を応援しよう」との思いから始まったJVC国際協力コンサートは、今年で25周年を迎える。毎年100名を超える合唱団の歌声が東京と大阪のクリスマスを彩るこのコンサート、その創設者であり実行委員長でもあるアイネス・バスカビルが今年で一線から身を引くことになった。そこで、コンサートが始まった当時のことを中心に関係者に話を聞いた。(編集部)



アイネス

■ソマリアで見た希望から

この二十五年は飛ぶように過ぎました。成長した子どもたちが巣立ち、夫のデイベッドが二度目に来日したのが一九八〇年。一緒に再来日した私は、その後五年ほどR-JJ(国際難民支援会)のために支援コンサートを開催していました。その資金をR-JJは世界各地で活動する国際NGOに分配しますが、そのうち当時小さかったJVCだけが日本生まれの団体でした。

今でもそうですが、当時から私は資金の受け取り先であるNGOの活動現場を度々訪問していました。当時ソマリアで難民支援をしていたJVCを初めて訪ねた八四年は、あの悲惨なおガデンでの飢饉きんごんの時ときでした。そこで働く若いJVCスタッフたちの意欲やその取り組みに、私は強く心を打たれました。難民に「これが必要だ」と言い渡すのではなく、彼らの話を傾け、必要とされる支援を提供していたのです。私の訪問中、

JVCコンサート実行委員長／JVC理事

アイネス・バスカビル

何人の赤ん坊が短い生涯を閉じたでしょうか。日本のスタッフは泣き叫ぶ母親を抱きしめていました。半砂漠地帯、乾燥地帯と言われるソマリアですが、やがてトウモロコシの畑ができて始め、人々が自活できるようになり、希望が見えてきました。そこで思いついたのです。JVCという、このまだほとんど知られていない小さな日本のNGOの活動のために、「国際協力コンサート」を企画してみよう。

そして、JVC創設者のひとりであり当時の事務局長でもあった星野昌子ほしのまさこさんの全面的な協力を得て、最初のコンサートを八九年に東京で開催することになりました。JVCの名のとおりに、「ボランティア精神」と「国際性」とに基づいてこのコンサートを実現するべく、私は全力を尽くしました。

■ボランティア精神あふれる人たちとともに

開催に向けて動き出した当時は、まだ日本国内のNGO自

体の数も少なく、知名度もありませんでした。しかし、ボランティア精神は徐々に広がりをを見せていきます。コンサート会場である昭和女子大学人見記念講堂は、無料で会場を提供してくれました。第一回公演には実に五百人以上が合唱団員として参加しました。その合唱指導は、郡司博ぐんじひろさんが引き受けてくれました。

合唱団員の多さから年明けに再演した際にも、再び郡司さんが面倒を見てくれました。栗山ユリアさんと三田眞知みたまちこさんは、生え抜きのボランティア。このコンサートの運営を業務面と心理面とで支えるJVCコンサート実行委員会、その初代委員です。その年に来日した指揮者、巨匠マキシム・シヨスタコビッチを公演後に目黒にある老舗のトンかつ屋さんでねぎらったのもこの実行委員会でした。田中菊子たなかきこさんも、私の五度にわたる執拗な電話攻勢で同じく初代委員を引き受けて以来、

今日まで熱心に働いてくれていきます。長年にわたるもうひとり

のボランティア五味澄子ごみすみこさんは今年九十歳を迎えられました。

その後、東京での毎年のコンサートが軌道に乗りつつあった九十四年、猪俣寛彦いのまたひろひこさんの尽力で大阪でもコンサートを始めることになりました。私と東京でのコンサートのことを紹介した『天声人語』(朝日新聞、九二年十一月十九日付)を読んだ猪俣さんが、第一回目の大阪でのコンサートの費用全額を気前よく提供してくれたのです。また、延原武春のぶはらたけはるさんは世界に知られた指揮者で、テレマン室内管弦楽団(当時、現テレマン室内オーケストラ)の創立者でもあり、かつ百人の団員を抱える合唱団コードリベット・コールの音楽監督でもある方です。この延原さんの一団が大阪でのコンサートに参加してくれることになり、現在に至るまで継続して協力してくれています。

九七年から事務局として手伝ってくれた岩間邦夫いわまのぶさんは、一年以上にわたってほとんど無給で働いてくれました(彼はそ

※注①・83～85年にかけてエチオピア周辺を襲った干ばつを原因とした飢饉。100万人以上が餓死したと言われている。



■ソマリアでJVCの活動を視察するアイネス (写真左端、87年頃撮影)。



■自らも本番公演で歌うとともに、開演のあいさつを担う (2012年撮影)。

の後JVCのスタッフになりました。スタッフの荻野洋子(おぎのひろこ)さんが事務局を担ってくれた時には、関西経済連合会の要人たちの前で支援依頼のためにプレゼンする機会がありました。彼女は大変緊張していましたが、要人たちが浴びせる執拗な質問を見事にさばいて、支援を勝ち取ったのです。

ボランティア精神というのは、日本社会ではなかなか理解されづらい概念ですが、このコンサートには多数のボランティアが参加してくれて今日まで続いてきました。コンサートにかかる諸費用は多数の企業の方々からの寄付によってまかなわれますし、公演のチケットの大半は、東京と大阪在住の合唱団員が手売りしてくれます。

■国際性、それゆえの葛藤も

このコンサートの「国際性」についても説明しましょう。曲目であるヘンデルの『メサイア』自体が、ヨーロッパで創作されてイエス・キリストを主人公にした物語でありながら世界各地で楽しまれている、国際的かつ普遍的な作品です。『メサイア』の主題である「苦悩と希望」は、抑圧や飢餓や戦争や津波を経験した今日の人々の状況

とそれらへのJVCの活動を反映しています。もうひとつの曲目であるバッハの『クリスマス・オラトリオ』は、ささやかな始まりと平和のありがたさを現しています。

コンサートのボランティア、合唱団員、楽団員の多くが日本人ですが、これまでのプロ指揮者二十五人のうち二十二人はヨーロッパおよび米国から参加しました。ソリストの多くも外国から訪れています。参加者の間の性格の違いや文化の違いからの行き違いもありますが、やはり得るものは大きく、お互いの文化や歴史から学ぶものが多くあります。

ノルウエーの指揮者であるライダル・ハウゲ(〇八年来日)は、「広島訪問は終生忘れられない」と力説していました。ニューヨークの指揮者、バーバラ・ヤー(二〇〇〇年来日、唯一の女性指揮者)は、公演後にコードリベット・コールが英語で歌った伝統的な感謝の祈り(Benediction)に涙を流していました。ジェイムス・キャバノー(九十四年来日)はダブリン出身の指揮者です。彼は、私がJVCボランティアとアイルランドの合唱団と合同での聖パトリック大聖堂における『メサイア』の演奏を

九十六年に企画した時に便宜をはかってくれました(「メサイア」の初演はダブリンで病院への支援コンサートとして演奏されています。そこで上げた収益はアイルランド癌協会に渡されました。米国人指揮者のジェフリー・リンク(九七年/〇六年来日)は握り寿司が大好物でした。ローランド・ジョンソン(〇一年来日)は、

私の故郷であるウインズコンシン州マディソン市出身の指揮者です。彼は八十歳を越えていましたが、連日の練習、そして長時間にわたる二回の本番公演をプロ精神を発揮して最後までやり遂げてくれました。国籍や性格、意見の違いから、ときには誤解も生じました。八十九年に来日したシヨスタコビッチ(ソ連生まれ、八十一年に家族と米国に亡命)は、コンサート終了後に訪れた私の家の台所で危うく郡司さんと殴り合いになるところでした。祖国脱出の是非についての議論の末でした。今だから言えますが、〇九年のコンサートでは、指揮者とアルト歌手が同じドイツ出身でしたが、演奏の技術的な面で妥協点が見つからず、最後の二週間はお互いに口もききませんでした。ありがたいことにコンサートは無事終了しましたが、

この「理由」についてもぜひ考えていただきたいと思っています。これまでこのコンサートが生み出してきた合計約二億三千万円の資金は、JVCのこれまでの世界各国ならびに東日本大震災被災地での活動に充てられてきました。参加して下さった皆さま、本当にありがとうございました。

■このコンサートが必要とされる限り、これからも

こうした様々なことを乗り越えて、「ショーは続いてきた」のです。これまで約五万七千人の方がこのコンサートに参加しました。その方たちも含めて私たち全員が、この複雑な世界情勢に関心を持っています。そして、途上国に住む同胞から学び、支援の手を差し伸べる必要性を常に胆に銘じておきたいものです。コンサートに来ていただく方には音楽を楽しんでいただくとともに、なぜこのコンサートが開かれているのか、その「理由」についてもぜひ考えていただきたいと思っています。

今の私の願いはただひとつ。二〇一四年以降も未永く、このJVC国際協力コンサートの「ボランティア精神」、「国際性」、そして「財政的支援」が引き継がれていくことです。皆さん、がんばってください！



大阪公演で当日ボランティアと（写真前列右から二人目が嶋、2009年撮影）。



JVC合唱団は新宿の教会を借りて毎週練習している。写真の指導は青木氏。

JVC合唱団の12月

合唱団事務局 柴大元しばひろゆき

八十八年、学生だった私は、当時二十七歳という彼のベートーヴェンの「第九」が歌いたくて郡司博さんの指導する合唱団に参加しました。そこで、当時から郡司先生と親しかったアイネスさんと出会いました。八十九年にこのJVC国際協力コンサートが始まり、私もその第一回公演に合唱団員として参加しました。その時の会場の熱気は今も憶えています。この時初めて、アイネスさんの国際協力活動に対する想い、そしてコンサートを実現させたその行動力を知りました。

一般企業勤務を経て合唱を中心とする舞台制作者になった私は、二〇〇〇年に当時まだ学生だったカウンターテノール歌手の青木洋也さんと知り合います。彼に合唱団の指導を依頼するなかで、私はその非凡な音楽的才能と人を惹きつける力に魅了されました。〇三年にアイネスさんから「JVC国際協力コンサート」の専属合唱団をつくりたい、良い合唱指導者はいないか」という相談を受けたときは、すぐに青木さんを推薦しました。

「JVC合唱団」が誕生しました。このJVC合唱団には純粋に合唱が好きなた方や青木さんのファンの方も沢山いますが、歌うことでボランティア活動ができる、国際協力の一翼を担えるから、という方も大勢います。そのJVC合唱団も十年目、合唱指導者として引継ぎたい青木さんが満を持して本番の指揮台に上がります。そして、アイネスさんは卒業されるとの事。本当にお疲れさまでした。私も参加させていただき、とても光栄で、感謝の気持ちで一杯です。

今回はひとつの区切り、来年から新たなシーズンが始まります。今後アイネスさんの精神を受け継ぎ、「JVCの活動支援」と「合唱音楽の喜びを共に」という合唱団のミッションを掲げて頑張っていきたいと思います。

ベネフィットのために

JVC理事 嶋紀晶しまとしあき

アイネス、デイビッド・バスカビル夫妻と初めて会ったのは八十四年のクリスマス。場所はソマリアのルーク。エチオピアからの難民への緊急救援活動をJVCが行なっていた時でした。その後も数回にわたってソマリアにいられたアイネスさんに、日々の活動に熱中するあまり自分たちの生活や衛生環境の管理が疎かになりがちな私たちは、よく叱られました。

私が日本に帰国し大阪で暮らし始めた八十八年の翌年、東京でコンサートが始まりました。九十四年になり、アイネスさんより「大阪でもコンサートをしますから手伝ってください」と連絡をいただきました。以来二十年間、共にソマリアで働いていた妻と運営のお手伝いをする機会をいただいています。

JVCの基盤が弱い大阪で今年二十回目の公演を行なえるのは、初演から出演いただいているコードリベット・コールさんのご協力があったからこそです。コードリベット・コールさんは六十余年の歴史を持つアマチュアの合唱団。音楽監督の延原武春さんのもと百人を超える団員の方々が毎週木曜日に練習をされています。また、指揮者・ソリスト接遇やステージマネージャーで協力いただいている北川さん、伊藤さん、佐々木さん、そして公演当日のボランティアの方々の協力によって続けてこられました。

一七三四年に作曲された『クリスマス・オラトリオ』、一七四二年初演の『メサイア』、どちらも時代を超えて歌い続けられています。特に『メサイア』の初演は、ダブリンで病院の支援のための演奏会として行なわれました。その後作曲家ヘンデルは自らの指揮によってロンドンの孤児のための養育院などで毎年演奏会を行ないました。

アイネスさんは引退されましたが、慈善演奏会を続けたヘンデルの意志に敬意を表し、アイネスさんの思いを受け継いでいきたいと思います。困難な立場を強いられる人たちのベネフィット（利益、役立ち）のために。

JVC 国際協力コンサート、その魂

JVC 初代事務局長／特別顧問

星野 昌子 ほしの まさこ

■「なぜキリスト教の曲を」

当時は御茶ノ水にあった JVC 事務所にアイネスさんが訪ねて来られた時が、たしか最初の出会いです。R-J での取り組み（支援コンサート）を通じて JVC を知り、ボランティアとして現地に行きたい、と話されました。とても控えめな、しかし芯はしっかりした方だな、そう感じたことを覚えています。それで行かれたのがソマリアでした。帰国後、R-J での彼女の取り組みを知っていた私は、JVC の活動資金をつくるためのコンサートをいっしょにできないか、と事務局長としてですがおぼろげと提案しました。数日後、「JVC はお金をつくるのがあまりうまくなさそうですね、やりましょう」と彼女は言ってくれました。

「なんで JVC が『メサイア』、キリスト教なのか」と事務局内で議論になりました。多少合唱の経験があった私は、「人間の力を超えた（神と呼ばれる）大きな存在によって生か

されている」という意識はどんな宗教にも共通すること、そして合唱とはひとりの素晴らしい声の人が大声で歌うものではなく、一人ひとりが他のパートの声と自分の声を合わせながらつくりあげていくことを意識して初めて素晴らしい合唱になること、それは JVC の理念や運営方針に通じる、と言いました。今思ってもちょっと苦しい説明ですが賛同は得られ、まあ試しにやってみよう、となりました。

■家族の支えと恩慮深さと

アイネスさんご夫妻の結婚四十一年のお祝いパーティーに、ご自宅のあるウィンスコンシンに招かれたことがありました。そこで、家族全員が彼女のこのコンサートへの取り組みを支えていることを改めて実感しました。とりわけ夫のデイビッドさん。そのときの招待客全員の交通費を（日本からの飛行機代も！）すべて彼が提供してくださったのですが、「私たち家族のなかで、神様に一番近いところにおいて世界に貢献しているのはアイネスです。それを家族として支えることができることが私の誇りなんです。彼女の仕事に比べれば、私のしていることなんて『ツメノアカ』にもなりませんよ」在日経験が長く日本語が達者な彼が、なんのてらいもなく言ったんです。もともと

彼は宣教師だったとは言え、心からの言葉だとわかって、もうね、まいっちゃった（笑）。この支えは彼女にとってとても大きいでしょうね。

また、初年度の公演日は偶然にも十二月八日だったので、彼女が来場者に向けての開演のあいさつで「今日はパールハーバー、記念的な日ですね」と切り出したのです。原稿を知らされていなかった私はちょっとびっくりしましたが、しかしそうした過去の争いや困難を乗り越えて共同で取り組むべき課題がいまの世界にはあり、その状況を少しでも良くするためにいっしょに協力しましょう、と続けたのです。ああこの人は思慮深い人だ、と感じ入りました。

◎ この二十五年間にわたり、アイネスさんは「世界の課題に対して、一人ひとりが望む形で参加できる／自分の可能性を露出できる」機会のモデルを、このコンサートで提供してきてくれたのかなと思います。アイネスさん、長い間お疲れ様でした。

JVC 国際協力コンサート略歴

- 【一九八九】 アイネスを中心に「JVC ベネフィット・コンサート」が東京で始まる。楽曲はヘンデル『メサイア』。
- 【一九九二】 『天声人語』で東京公演が紹介される。
- 【一九九四】 『天声人語』掲載をきっかけに大阪公演が始まる。コンサート名を「JVC 国際協力コンサート」に変更。
- 【一九九七】 大阪公演で初めて『メサイア』以外の曲、パツハ『クリスマス・オラトリオ』を演奏。
- 【二〇〇四】 青木洋也先生指導、柴大元氏運営の「JVC 合唱団」を設立。
- 【二〇〇六】 東京公演でも初めてパツハ『クリスマス・オラトリオ』（全曲）を演奏。
- 【二〇一三】 二十五周年を機にアイネスが実行委員長退任。

JVC 国際協力コンサートの今後

2014年から「音楽で人をつなぐ」JVC 国際協力コンサートの新しい歴史が始まります。指揮者には古楽の本場オランダよりマノイ・カンブス氏を招聘。これまでアイネスが作ってきた「土台」とその精神を受け継ぎ、新しい挑戦を続けていきます。(石川)

「変わっても、変わらないものを大切に

コンサート事務局

石川 朋子
いしかわ ともこ

■始まりのアクション

『JVC 国際協力コンサート』。人見記念講堂の前に出ていたこの看板で、私はJVCと出会いました。「国際協力」「ボランティア」に関心はあったものの、何も動けていなかった当時の私は、何かつながるかも、という期待を持って一百万のチケットを買い、『メサイア』を聴きに行きました。会場でJVCのパンフレットを見てすぐに会員に申込み、家で会報誌を読むだけの会員時代が一年ほどあり、その後、東京とエチオピアでボランティアをし、そして〇二年からコンサート事務局担当になりました。「今」につながる一枚だったことを思うと、アクションを起こすことの大切さを実感したコンサートでした。

■ときには変える勇気を

このコンサートの目的は、「JVCの活動資金をつくる」「JVCを知ってもらう」そして、「音楽を楽しむ」です。私が担

当になった〇二年は、企業協賛が大幅に落ち込み始めていた頃でした。一千万円以上あった収益は、漸減し六百万円程度になっていました。その改善のため、〇四年に東京のオーケストラを変え、JVCが運営する「JVC合唱団」を設立しました。その時の関係者での議論では、「合唱団を変えたら絶対続かない」「今のオーケストラのネットワークは企業協賛には重要」という意見と、「今のままでは続かない。変えてみよう」という意見に分かれました。

議論を重ねて結論も行ったり来たりする状況の私たちに、星野さんがおっしゃった今でも忘れられない言葉があります。「今がベスト、と思った時点でその団体(活動)は硬直する。もっとうまく、もっと良くなるには、と常に考えることが大切。Creative Chaos (創造的混沌)はその時々において必要なこと」。この言葉が、「変える不安」で立ち止まっていた私たちの背中を押してくれました。

この「JVC合唱団」は、

それまで以上に「音楽で国際協力」の特徴を強くしていきまし。JVC合唱団ができて一年目か二年目の公演直後、合唱団の方から「これまでは自分のために歌っていた合唱だけど、初めてJVCのスタッフの話で聞いた、現場の誰かを思って歌いました。感動しました」と言われたときは、事務局として本当に幸せな気持ちになりました。

こうした試みで収益は回復したものの、企業協賛が増えてきたわけではありません。企業数は最高収益を出した頃に比べて昨年は半数弱でした。企業協賛は景気に影響されやすいものですが、そうしたなかでも継続して、また新規に支えてくださる企業があります。「景気に左右されないよう我社は少額だけど継続して応援したい」「JVCの現地の人を大切にする姿勢は、中小企業と同じ。倒産しない限り応援しますよ」の言葉に励まされます。

■人をつなぐコンサートに

今現在、すでに来年以降の公

演の準備をアイネスに変わって事務局が進めています。そのなかで、このコンサートに関わってくださる多くの人が「JVCを応援するアイネスさんのスピリットに共感して」参加されていることを改めて実感しています。「現地の人のために」「コンサートで人をつなぐ」この試みは、東京二十五年、大阪二十年という年月をかけ、アイネスを中心に続けてきたのです。

彼女は指揮者やソリストとの出演交渉の際、「あなたの技能と時間をJVCのために使ってください」と言います。出演者にきちんとこのコンサートの趣旨とJVCを知ってもらい、「お互いに一緒にコンサートを「つくる」という気持ちを持ってもらいたいと強く願っているからです。今、私は同じ言葉を、このコンサートをこれから一緒に支えていただきたい皆さんへ言いたいと思います。「あなたのお時間と技能を、JVCのために使ってください。一緒にコンサートをつくっていきましょう」。

『現場から学ぶ人道支援』に参加して

元アフガニスタン事業インターン 曽根 啓太

昨年よりスタートした『現場から学ぶ人道支援』は、JVCの人道支援グループが総力をあげて準備を進め開催している夏期集中講座。その様子を、春から5ヵ月間インターンをしてきた曽根さんより報告する。(編集部)



■議論を通して現場を伝える

九月七日・八日、JVC東京事務所にて二日間にわたる人道支援講座が開かれた。本講座では、JVCのスタッフが講師となり、現場での経験を踏まえ、人道支援に対する姿勢や人道支援そのものが持つジレンマなどについてレクチャーをするだけでなく、参加者間でも白熱した議論が繰り広げられた。

本講座では、まず代表理事の谷山が、JVCの活動の歴史の中で、「人道支援」を、「本当に困っている人に支援の手を差し伸べる活動」と位置づけたうえで、緊急支援担当の下田からタイのパンガー県におけるビルマ系不法労働者への支援の事例紹

介を通じて、今もJVCの人道支援に対する姿勢が変わっていないことが示された。そして、

アフガニスタン事業現地統括の小野山とパレスチナ事業担当の並木による人道支援と政策提言のジレンマや、スーダン事業担当の佐伯と小野山による人道支援における民軍協力(支援の際に軍と文民が協力して支援する方法)是非についての議論では、様々なバックグラウンドを持つ参加者の多様な発言が飛び交い、白熱した議論が繰り広げられ、参加者自身が互いの意見を学び合うことができた。最後の広報担当の広瀬のセッションは、人道支援を実施するうえで資金調達と広報に関する広告制作ワークショップで、楽しみながらも真

剣に人道支援関連の広報について学ぶことができた。

■違いを超えてベストを探る

人道支援は人の生命に関する直接的な支援であると同時に、活動地域の政治的問題の解決と密接に関連している。人道支援の実施が可能な「人道スペース」は事例ごとに異なり、それが活動の幅や選択肢に影響を与えている。また、支援をする中で見えてきた活動地域の政治問題について外部者である人道支援団体がどう関わるか、あるいは関わるべきではないのか、また、人道支援団体が職員の安全確保・機動性向上の観点から軍と協力すべきか、活動を継続させるための財源をどのように確

保すべきかなど、人道支援をすすめるうえで考慮すべき問題は尽きない。

私は、今年の八月までアフガニスタン事業インターンとしてJVCに参加していた。JVCは、アフガニスタンで診療所の運営や、診療所を中心とした地域コミュニティのエンパワメントを行なっている。私は常にアフガニスタン国内の治安について、また、治安の問題と関連した政治腐敗の問題、アメリカを中心とする国際社会とアフガニスタンの関係、PRTという民軍協力のあり方について、業務やボランティアチームを通じて考えてきた。本講座でも、こうした問題についての意見や立場は見事に分かれた。しかし、重要なのは、その双方の立場の考え方を尊重した上で、支援を必要とする現地の人々にとって何がベストかを考えることであると思った。

人道支援の現場で起こりうる非常に困難な問題を現場の経験に依拠しながら、時には抽象化して議論することで、参加者が人道支援の現場で起こる問題について真剣に考えるきっかけとなった今回の講座。今後こうした機会がJVCで設けられることを楽しみにしている。

■タイムテーブル

【1日目】 人道支援の現場での挑戦とNGOとしての立ち位置を考える	
10:00 ~ 10:45	オリエンテーション&アイスブレイキング
10:45 ~ 12:30	イントロダクション：人道支援×JVC (代表理事 谷山) →質疑応答・意見交換 (昼食)
13:30 ~ 15:00	人道支援×現場の課題 (南タイ事業担当 下田) →質疑応答・意見交換
15:15 ~ 17:00	人道支援×アドボカシー (アフガニスタン事業統括 小野山) →質疑応答・意見交換
【2日目】 民と軍の望ましい距離とは？効果的な情報発信とは？	
10:00-12:30	人道支援×民軍関係 (スーダン事業担当 佐伯、小野山) →質疑応答・意見交換 (昼食)
13:30 ~ 14:15	スカイプでつなぐ現場(アフガニスタンとパレスチナ：日常生活、一日の仕事の聞いてみよう)
14:15 ~ 16:15	人道支援×情報発信 (広報担当 広瀬)
16:15 ~ 17:00	まとめ、全体討論

「説明・約束」と異なる 「現実」を前にして

南アフリカ事業担当 渡辺 直子

■訪問調査を実施

訪問調査に参加するという形で、私は今回初めてモザンビークを訪問した。プロサバナ事業（以下本事業）についての経緯を知り、これまで外務省・JICAとの協議にも多少なりとも関わってきたなかで、いったい現地では実際に何が起きているのか、外務省・JICAによる本事業の説明や約束は本当に実施されているのか、直接見聞きして確かめたかったからだ。

結論から言えば、「説明・約束」と「現実」の間には大きな齟齬^{そご}があったと言わざるを得ない。以下、外務省・JICA側が示してきた「小農は土地を有効活用して生産できておらず貧しい①」ために本事業は「投資によってモザンビークの小農を豊かにする②」ことを目的としており、事業内容については『時間をかけて対話していきたい③』という三つのポイントにしばって報告する。

■①「土地を奪われたから使えなくなったんだ」

今回の調査では、本事業対象三州において、JICAによる本事業のパイロット事業^{※注①}とその契約企業、「土地収奪」の六カ

所の現場、市場や関連NGOを訪問して聞き取り調査を実施した。なかでも強烈に印象に残ったのは、「土地収奪」の現実だ。「No Gees」というノルウェー企業によって土地が奪われた村で私が聞いた話はこうだ。

「二年前くらいに会社の担当者が政府関係者と来て、ユーカリ植林に使う土地を欲しいと言ってきた。学校や病院の建設を約束されたし、植林後も主食のキャッサバやメイズを植えられる、と聞いた。だから昨年、村の土地の一部の使用許可を与えた。しかしその後、約束されたものは今も一切もたらされていない。植えてあったキャッサバは引き抜かれた。それどころか、会社は約束の範囲を超えて、村のもっとも肥沃^{ひよく}な土地にも植林し始めた。以前は主食も含めて二十種類以上の作物を育てていたし、村人は家族を養っていた。いまは土地を失ったから、食べ物がつくれなくなってしまった。このままでは飢えてしまう。耕作地を求めて村を去る人も出始めている」

■②誰のための農業投資か

国連機関が発表する人間開発指数などを見れば、モザンビーク

クが様々な課題を抱えていることは確かである。しかし、前述したような以前の生活の様子を聞いた限りでは、それが「貧しい」とは正直思えなかったし、彼ら自身も自分たちの生活に課題はあるにせよ、それを作物の生産量と結びつけて認識してはいなかった。

本事業は「モザンビークの小農のため」とされる一方で、「農業開発で生産された大豆を日本に輸入」し、「日本の食料安全保障に貢献する」とも喧伝^{けんてん}されている。そして、本事業の対象三州では、本事業の契約が結ばれた〇九年以降に農業投資が増えており、その多くが大豆を生産している。前述の「No Gees」も植林から大豆生産に切り替え始めている。この傾向は、国内でこの三州に限られている。このことから、本事業が農業投資を呼び込み、その投資が貧困をつくりだしている、という構造が見えてくる。

■③対話とはなにか

調査に先立って七、八日に開催された「市民社会会議^{※注②}」においても、前述したような農業投資による土地収奪の事例や、農村部における政府関係者による日常的な抑圧などの報告が多く

なされた。本事業に関する情報不足とそれへの不安も訴えられた。しかし、会議に出席した政府関係者たちの発言は、彼ら自身の間ですら相互に齟齬^{そご}が見られ、誠実さは感じられなかった。すでに土地収奪が頻発し、しかし本事業の情報は充分には提供されず、社会的背景から農民間々人が大きな声をあげることにも難しい。モザンビークの人びとが不安を感じるのも当然である。こうした状況においても、JICAなどの事業関係者が現地で開催してきた「ミーティングの場」では、記録として残る紙の資料は配布されず、口頭での説明に終始してきたそうだと人びとはこれを一方的な「説明」であり、「対話」ではないと認識している。

◎

このままこのプロサバナ事業が進められれば、私たちが日本人の生活のためにモザンビークの人びとの生活が犠牲にされてしまう可能性が高い。一度土地が取られてしまえば、それを取り返すことは非常に困難である。そうなる前に、JICAは引き続きモザンビークの農民・市民社会などと連帯し、事業関係者との「対話」を続けていく。

ODAのプロサバナ事業に関する連載。4回目の今回は、8月6～18日にモザンビークの事業対象地を中心とした訪問調査に赴いた2名のスタッフによる報告が中心だ。この調査は、「モザンビーク開発を考える市民の会」を始めとする複数の日本の団体によって共同で実施されたもの。帰国後に事業の中断と見直しをもとめる声明を発表（9月30日）、調査の詳細な報告書も10月末公開を目指して作成中である。（編集部）

※注①・パイロット事業：PDIF (ProSAVANA Development Initiative Fund)。次ページにあるマスタープランを作成するための事前段階における調査を目的とした事業。

※注②・市民社会会議：8月7、8日に首都マプトで開催された会議。日本・ブラジル・モザンビークの三カ国から約200名の農民・市民社会が参加、8日にはモザンビーク農業大臣ら政府関係者も参加した。

知らないうちに農地を失う農民たち

調査研究・政策提言担当 高橋 清貴



■遠い国での日本の事業

バンコクとヨハネスブルグでの乗換時間を含めて、モザンビークの首都マプトまで約二十六時間。国内線に乗り換えて北部の州都ナンプーラまで二時間。ナンプーラから舗装されていないダートを四駆で三時間ほど内陸部に向けて揺られ、ようやくナンプーラ州西部、リバウエ郡イアパラに着く。ここは、プロサバンナ事業のリークされたマスタープラン^{※①}案でクイック・インパクト・プロジェクト^{※②}の対象地として指定された所であり、特に土地の事前確保が計画されている。私は、三つに分かれた今回の調査チームの一つとして、この地域を訪れ、農民から話を聞いた。知りたいことは三つあった。土地収奪の実状、そして本事業に対する農民の理解度、最後に農民たちの暮らしてある。いずれも「小農支援」を考える上で不可欠な項目だが、マスタープラン案には書かれていない。

■止められない土地収奪

まず、土地収奪は予想以上にかなりの程度（広さと速度）で進んでいる。それも随分前から。話を聞いたある農民は、

〇四年に耕していた畑地を企業に奪われたが、どうやってクレームすればよいかわからず泣き寝入りをしたそうだ。別の農民は、友人の話として、最近企業に土地を奪われた話を語ってくれた。聞いたところでは、農民たちは、実際に土地を利用していてもそれを証明する書類がない。他の村でも聞いた話だが、仮に何らかの書類を持っていても、それを村のローカル・リーダーに預けている。そのため、企業はローカル・リーダーと話を付けて（土地を手に入れる代わりに雇用するなどの交渉も含めて）、土地を確保しているのだ。この企業が最近フェンスで囲い込んだという。土地を見に行きたいと言ったら、「危険だからやめろ」と止められた。そして、「外国から来た知恵のある人たちよ。どうやってこの流れを止められるか教えてくれないか」と詰め寄られ、私は下を向くしかなかった。

■農民に知らせないままに

当然だが、農民と話をするとき、来訪の目的を伝える。私が「プロサバンナのことにについて知りたい」と言うと、ほぼ全員が「聞いたことはあるが、よくわからない」と答えた。ある

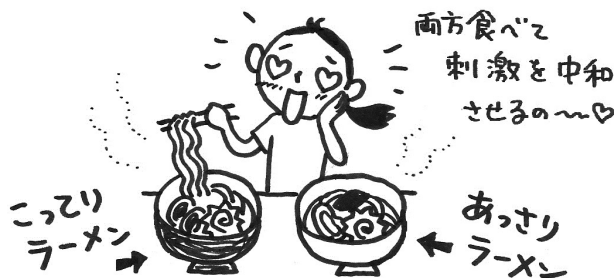
日、モザンビーク、ブラジル、日本の三人がやって来て「プロサバンナという事業をやるが、土地がほしい」と言いに来たらしい。農民たちは訳がわからず黙っている、彼らは帰って行った。それが意外わからないという。三人が誰なのか名前はおろか、プロサバンナがどんな事業なのかも知らないそうだ。しかし、「大きな事業らしい。また土地が取られるのか？」と強い不安と不満を口にしていた。一体これは何なのか？ これだけの大企業で、農民に影響が出ないわけがない。それを計画段階から丁寧に説明するのだから、マスタープランづくりというプロセスだろう。しかし、訪問者は名前や連絡先も明かさず、資料も置いていかず、「土地が欲しい」とだけ行って去って行く。これが対話と言うなら、JICAが言う『参加型開発』も地に落ちたものだ。土地が奪われてきた過去に加え、今新たに「土地を欲しいが事業」が始まるうとしている。

への流通も仲買人任せになっている。彼らから種を買い、収穫したら買い取ってもらうが、安く買い叩かれるとばやいていた。JICAが本当に農業支援をするなら、こうした課題を農民たちと一緒に考えていくことではないのか？ なぜ、この当たり前のことができずに「モザンビークには大規模農業開発が必要だ」と口角泡を飛ばすのか、まったく理解できない。プロサバンナ事業は、一部のコンポーネントをパイロット的に進めながら、マスタープランづくりを進めている段階である。しかし、本事業が始まってしまうえば、予算執行や広範なステークホルダーの関与があるためにより大きな問題を起さないと限り止めるのが難しくなるだろう。事業適性の判断や抜本的な見直しは、事業前の今のうちに行なわれなければならない。そのためには、何よりも事実に基づいた当事者（小農）の理解と対話が不可欠だ。マスタープランという「援助屋」が仮説に基づいて頭の中で描いた「開発」の大きな絵を語るのももう止めて、農民の置かれた状況から始めない限り、この事業が小農を苦しめることは明らかだと確信した。

※注①・マスタープラン：開発事業における基本設計のこと。JICAはこれを「現在作成中」としている。
 ※注②・クイック・インパクト・プロジェクト：本事業の一部で比較的短期間で結果を得るために実施する事業。
 ※注③・このプロサバンナ事業においては、こうした事業プロセスの進め方自体にも問題がある。これについても次号以降にまとめる機会を持ちたい。

限りなきラーメン愛

ラオス事務所現地調整員 林 真理子



私はラーメンが好きだ。

転職して東京に出てきて初めて買った本は「ラーメン特集」の雑誌だった。前職で京都に住んでいたときから、自転車を1時間以上駆って有名店の行列に参戦していた。「アフター5は何してますか?」と聞かれては「ラーメン巡りです」と答えていた。ラーメンは健康のパロメーター。体調の良し悪しはラーメンへの食欲ではかる。私の生活はラーメンとともにあるといってもいい。

ここで、私がすすめるラーメン店トップ3を紹介したい。まず、1つ

目は武蔵境にある「大山屋」の濃厚とき卵ラーメン。麺の太さと硬さが絶妙。麺が濃厚スープに絡む感覚もこれまた絶妙。2つ目は、吉祥寺にある「虎洞」のつけ麺。ポイントは、とんこつ醤油のスープの中に感じる微かな酸味とかつおだし。幾重にも重なる濃厚な味を楽しんでください。そして、3つ目はこれも吉祥寺にある「ブブカ」の油そば。味は若干ばやけているが、あの油っぽさが食欲を刺激してとまらない。我が家が東京の西側にあったので地理的に偏った感は否めないが、それでも自

信をもっておすすめできる3軒だ。

そんなラーメン好きの私にも転機が訪れた。その名も「加齢」。胃が劇的に弱くなった。特ににんにくに弱い。胃のドラキュラ化である。にんにくが多く入ったラーメンを食べると、数時間は激しい胃痛に悩まされる。しかし、私の好きなラーメンは塩ラーメンやあっさりしょうゆの類ではなく、にんにくと背脂がはいったこってりラーメンなのだ。それゆえ、ラーメンを食べる前には覚悟を決めなければならない。ラーメンか胃痛か、それが問題である。

映画『標的の村』

監督：三上智恵／制作・著作：琉球朝日放送／2013年／91分

みるよむきく



(C) 琉球朝日放送

本作品は、在日米軍による輸送機「オスプレイ」の配備、離着陸用ヘリパッド（ヘリコプター着陸帯）の建設に反対する沖縄住民の活動を追ったドキュメンタリー作品である。昨年十二月にテレビ放送された作品の評価が高く、最近の状況も盛り込み映画化されたものだ。関東に住んでいる私も、オスプレイについては「事故のニュースで頻繁に目にする危ない飛行機」というイメージを持っている。

舞台となる沖縄本島北部の東村・高江地区。自然豊かな場所、子どもたちがのびのびと育つにはもってこいの場所に感じられる。しかし、ここはアメリカ軍のジャングル戦闘訓練場に囲まれていて、戦闘機が飛び交う、いつも危険と隣り合わせの地域でもあるのだ。〇七年、その場所にヘリパッドの建設計画が持ち上がった。その後の報道などから「オスプレイが来るのでは…」との住民たちの恐怖

が増す中で、反対運動は数年にわたって続く。そして去年の九月、普天間基地にオスプレイが配備される日が近づく。高江の人々も駆けつけ、住民たちの必死の抵抗は激しさを増す。配備前日は報道陣も排除される中で必死の取材。しかし、オスプレイは来てしまった。この場面での、子どもたちの声にはぐつときた。「どうして言うことを聞いてくれないの?」「オスプレイがきたら学校に行けないよ…」日常生活が奪われてしまうことへの、悲痛な言葉。「お父さんお母さんが頑張れなくなったら、自分が引継ぐ(反対し続ける)」、そんな言葉も聞かれた。

高江の人々の頭上にオスプレイが旋回するようになり生活を脅かす。さらにオスプレイは本年八月に普天間基地に追加配備された。住民たちはこれからも粘り強く反対の声をあげ続けるだろう。続けなければならないことが悲しい現実でもある。地元テレビ局が投げかけた沖縄の現実、私自身も目を背けることがないようにしたい。そして、より多くの人々にこの映画を通して沖縄の現実を知っていただきたいと思う。

(JVC会員 藤井猛史)

JVCは、現在9の国/地域と東日本大震災被災地で活動しています。

南アフリカ



■ HIV/エイズ(リンポポ州)

7月下旬～8月上旬の8日間で、HIV/エイズ遺児や困難に直面する子どもたちが放課後に集まるドロップイン・センターのボランティアたちを対象にカウンセリング法のフォローアップ研修および救急法の研修を行った。前者では3月の研修後の振り返りを行なうなかで子どもの虐待を解決したケースなどの成果が共有された。後者では緊急現場での安全確保ややけどへの対応など16のトピックについて実践的方法を学び、知っている伝統的なノウハウに加えて、新しい知識を身につけることができた。8月半ばには7月に続き子どもの状況を把握するための家庭訪問と調査を実施した。9月上旬～半ばの10日間でドロップイン・センターおよび訪問介護に携わるボランティア60名を対象に、エイズ治療に関するフォローアップ研修を行ない、参加者間で関心の高かったHIV感染した子どもへの対応やARV(エイズ治療薬)に関する最新情報と服薬方法などを学んだ。8月半ばには家庭菜園研修も実施した。(渡辺)

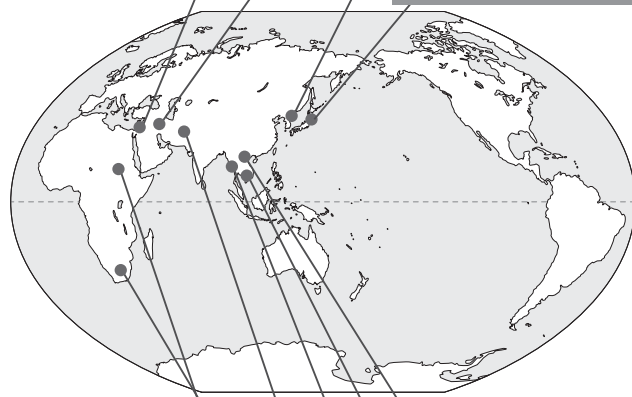
■ 8月末にはカウンセリング研修の修了式を行なった。

イラク

パレスチナ

コリア

東日本大震災



スーダン

南アフリカ

アフガニスタン

ラオス

カンボジア

タイ

ラオス

■ 森林保全/農業・生活改善事業(サワナケート県)

雨期の農繁期であるこの時期は、子供たちも学校の休みになるので家の農作業を手伝う。森林関連活動では、民族学校の生徒たちの休みを利用して人形劇の活動に取りかかった。村人たちに自然資源管理や土地利用の大切さを伝えるこの活動は、自主性が大切であるため、村の若者たちを巻き込む。7月から9月にかけては生徒と保護者たちにこの活動について説明した。また9月にはピン郡の行政官に向けたGIS(地理情報システム)研修を行なった。

農業活動ではSRIの実践者と稲発育状況の確認のため村々を巡回した。村人の生計のリスク回避にもつながる家畜銀行活動では、初めて大型家畜である牛銀行の設置を試みている。試験的に実施するピン郡の村で家畜銀行のルールの確認や飼育舎の設置などを行なった。

8月にはJVCの過去と現在の活動、その意義と役割を見直すためタイを訪れ、JVCタイが過去に行なった活動を見学した。ラオスからは林とラオス人スタッフ4名、カンボジアからは7名が参加した。その他、林が8月下旬から1ヵ月、グレンは9月に1週間日本へ一時帰国した。(林)



■ かつてのJVCタイの活動であったコンケン県有機市場を訪問。

タイ

■ 農村派遣研修

8月に過去にタイで実施した「地場の市場」プロジェクトの振り返りの場を持った。JVCのプロジェクト終了後も市場は継続的に運営されており、市場委員会の委員長からは「JVCから一方的に支援を受けてきたのではなく、ツアー参加者やインターンの受入などこちらから学びの場を提供してきた。JVCとはパートナーだと思っている。JVCと一緒にやったプロジェクトを通して農民の自立は可能だということを私たちは学んだ」という発言があった。カンボジアやラオスから参加したスタッフにとってもNGOと農民の関係を考える上で大きな学びになった。



■ 市場委員会の委員と「地場の市場」プロジェクトの振り返りの場を持った。

■ 南タイでの医療支援活動

南タイのパンガー県において現地NGOと共同でビルマ人労働者とその家族を対象に医療支援活動を行なっている。8月に南タイに出張し、会計のチェックと今年度に行なう事業評価について話し合った。(下田)

東日本 大震災

■鹿折地区での復興支援 (宮城県気仙沼市)

防災集団移転ではアドバイザーを派遣し、住宅相談会を開催。また、仙台から専門家を招き、住宅の建設方法に関する勉強会も実施した。「気仙沼みなとまつり」に合わせて企画した住民との交流イベントには関東から6名が参加した。さらに岩手県陸前高田市にある「長洞元気村」を訪問し、地域資源を生かした地域づくりの取り組みを視察した。仮設住宅における生活不活発病の予防の一環として、特に男性入居者の趣味をいかした「釣りサークル」を実施。第4回目開催に至った。東京事務所では気仙沼ボランティアチームが結成された。(伊藤)

■災害FMと仮設住宅サロンの運営支援(福島県南相馬市)

サロン支援では、協力団体つながって南相馬の関係者(代表今野由喜さん、仮設住宅サロン管理者5名、ヨガ教室先生)とJVC南相馬担当2名が一堂に会するワークショップを開催した。これまでなかなか腰を据えて話す機会がなかったので、サロン運営について活発な意見交換がなされた。仮設住宅のサロン4カ所の運営支援は引き続き継続。1日あたり25~40の方がサロンを訪れている。健康維持のためのヨガ教室、太極拳、一坪菜園も継続的に開催されている。災害FM支援では、来年度以降の運営に関して市役所・災害FMの間で議論が活発に交わされている。JVCは引き続き議論に加わり、協力をしていく。(白川)



■サロンに一度顔を出して知り合いになったお父さんたち。(南相馬)

カンボジア

■生態系に配慮した農業 による生計改善(CLEAN)

07年からシェムリアップ県東部で活動を行なっている。雨季が本格的に始まり農家が田植えを始める時期であったため、研修を実施し、農家に幼苗一本植えを取り入れてもらえるように働きかけた。また農産物加工グループでは前回スタディーツアーで習った作り方を模倣し、加工品作りに取り組んだ。

■環境教育(EE)

09年4月からシェムリアップ県東部の小学校で実施している。日本の4大学のスタディーツアーを受入れ、生育中の苗木のモニタリング、環境教育教材作成の継続、地域の有用植物の情報収集とその図鑑作りなどを行なっている。10月の小学校新学期に向けて環境教育実施の準備を教員と進めている。

■資料・情報センター(TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を94年から提供している。TRCオリエンテーションを実施し、JVCスタッフがプロジェクト計画に関する研修を実施した。また新規利用者獲得のためのTRCのパンフレットを刷新した。

■技術学校

85年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を運営している。安定して月100台以上の修理台数を確保しており、移転後からだいぶ経営が安定してきた。日本の企業から協力の依頼も多数来ている。(坂本)



■キュウリの漬け物を袋詰めする加工グループのメンバー。

コリア

■絵画交流『南北コリア と日本のともだち展』

◎ピョンヤン訪問

『ともだち展』実行委員会メンバーが、8月下旬に平壤を訪問。日本人小学生1名と東京・千葉の朝鮮学校に通う9名が、絵本作家の浜田桂子さんとともに平壤市ルンラ小学校とチャンギョン小学校で交流し、絵本『へいわってどんなこと?』を読んで感想をわかちあひながら、絵画展のための作品づくり「みんなでパレード!」に取り組んだ。

◎ソウル「東アジアこども平和ワークショップ」

韓国の協力団体オリニオッケドム主催のワークショップに日本から3名の子どもが参加し、韓国、モンゴル、中国など全部で45名の参加者と「平和について身体で感じる」3日間を過ごした。最終日には、平壤に続き浜田さんによる共同制作を行なった。(寺西)



■日本から訪問した朝鮮学校の子もたちと絵本を読む(平壤市ルンラ小学校)。

スーダン

■紛争による避難民・難民への支援

2011年に勃発した紛争が今なお続く南コルドファン州カドグリ近郊で、流入した避難民と地元住民に対する支援を実施している。

雨季の本格化した8月以降、政府軍と反政府軍との戦闘は沈静化。さらに、スーダン全土を襲った大雨による水害を理由に反政府軍は9月より1ヵ月間の停戦を宣言。南北スーダン関係も、9月上旬に南スーダン大統領がスーダンを訪問してトップ会談を実施、改善の兆しを見せている。

カドグリ近郊に州政府と国連が協力して設置した避難民向け住居230戸への入居が7月に開始された。JVCは入居者への生計向上支援として穀物・野菜の種子を配布。住居周辺では畑作が始まっている。さらに給水支援を実施するため、水質調査をはじめ政府関係者、入居者との話し合いを重ねている。(今井・佐伯)



■避難民向け住居の入居者に話を聞くJVCスタッフ。

パレスチナ

■子どもたちの栄養改善支援（ガザ地区）

栄養などに関する実地研修を無事に終了し、ボランティア30名は少しずつアマチュア栄養士として成長している。家庭訪問を通じたカウンセリングや教育セッションを主体的に実施し、子どもたちの栄養状態検査も終了した。この間、1,034人の子どもが支援対象者として登録された。一方で、エジプト政変の影響で物資が現地に届き難くなっており、失業率の増加や燃料不足が深刻化している。今後が心配される。



■調理実習後に子どもにご飯を食べさせる母親たち。

■学校保健・健康教育・巡回診療支援（東エルサレム）

9月から、外務省の支援事業として2期目に入った。1期目では、スケジュールや予算の管理方法が確立されておらず、調整に多大な時間を費やした。保健・教育サービスの質をいかに向上させるかという課題も残った。これらの反省を生かし、2期目ではパートナー団体との間で明確なルールを設定し、定期会合の回数を増やす。また、日本人医療専門家の現地出張に加え、現地医療チームを日本に招聘して研修を実施する。

■広報活動

現地調整員の金子が一時帰国し、東京で4回、神奈川で1回、事業報告会を開催した。報告会には合計160人以上の参加者があり盛況であった。また、東京事務所でインターンをする大学生やボランティア活動に関心をもつ多数の日本人が、現地事務所や東エルサレムの事業地に来訪し、パレスチナ人が強いられる占領下での生活や支援活動の現場を体験した。（今野・金子）

調査研究・政策提言

■プロサバナ事業現地調査（8月6日～17日）

プロサバナ事業に関して市民と外務省・JICAとの間で意見交換を行ってきたが、双方で主張が食い違い平行線の様相を呈し始めていた。これを打破するためには、実際に現地で生じている事象（土地収奪や農業開発の現状）やモザンビーク市民社会の意見を正確に把握することが必要と考え、これまで意見交換会に参加してきた市民社会側有志がそれぞれ自費で約10日間にわたってモザンビーク北部ナンブール州で現地調査を行なうことになった。

JVCの活動地ではないが、農民の権利やODAのあり方など重要な課題を含んでいるため、調査研究事業として渡辺、高橋の二人が現地に派遣された（報告概要は本誌8,9ページを参照）。（高橋）

アフガニスタン

■女性と子どもの健康改善のための地域保健医療事業

ゴレークの診療所では長らく欠員であった女性の医師が新しく就任した。安全なお産や衛生、病気予防について村の女性たちが学ぶ「母親教室」では、すでに修了した女性の家庭を訪問するフォローアップ活動が開始した。改善点を指摘していた家族を再度訪問すると、大幅な改善が見られた。また、クズ・カシュコート村では長老たちからなる「保健委員会」の活動として、村に共用の保健関係の資料室を設置する動きが出てきたため、実現に向け支援している。



■カブールでの平和に関する全国会合で発言するスタッフ。

■教育支援活動

夏休みで学校での活動が休止している6月から9月の間に、活動の振り返りと分析を行なった。健康への意識向上や読み書き能力向上を目的とする壁新聞の活動では、期間中に6校の生徒から合計269の作文が自主的に提出され、「衛生」や「健康のしくみ」などのテーマが多く見られた。女子校の生徒が熱心に参加しており、作文の数も増えていることからこの活動への関心の高まりがわかる。

■政策提言

外国軍完全撤退を来年末に控えて、和平プロセスにおける伝統的なリーダーの役割について議論する全国的な会合が7月に開催され、JVCの現地スタッフも東部ナンガルハルの市民社会代表の一人として出席。アフガニスタン地方警察（ALP）が起こす事件について訴え、参加者から賛同を得て、政府高官とメディアからも注目された。（加藤）

イラク

■引き続き下半期の活動を検討

現地NGOのINSAN Iraqi Society(インサーン)と取り組んだ「子どもたちとつくる地域の平和」ワークショップの内容を改めて振り返り、また日本側で今後どのような取り組みをするかについてタスクチーム内や支援者と協議して、今年11月のイラク中北部訪問などを盛り込んだ下半期の活動計画の詳細の検討を進めた。

■白血病への医療支援

JIM-NET（日本イラク医療支援ネットワーク）と実施しているバスラでの医療支援活動のレビュー（振り返り）に向けて、JIM-NETとの間でレビューの内容やスケジュールについて確認した。（谷山由）



■支援先の病院で治療を受ける少女（JIM-NET提供）。

映画祭紹介

第七回

国際有機農業映画祭

今年で七回目となる国際有機農業映画祭は、十一月二十二日（金）から二十四日（日）の三日間、「土くれを握りしめて」をテーマに開催される。今回は、法政大学沖縄文化研究所との共催で、法政大学外濠校舎（東京・市ヶ谷）を会場に、日本初公開三作品を含む九作品が上映される。二十二日は沖縄文化研の公開講座のみ、映像上映は二十三日と二十四日となっている。



つ父親が、毎日の食材に疑問を持ち、「遺伝子組み換え」が何であるかを探して歩くという作品。とてもわかりやすく遺伝子組み換えとは何かを解き明かしている。遺伝子組み換え作物や加工食品ばかりでなく、その対極にある在来種の保存と継承の問題（自家採種）や、北極圏スピッツベルゲン島に設けられた Global Seed Vault（国際的なジーンバンク）にも取材しているところが、これまでの同じような作品とは異なっている。

【映画祭公式ウェブサイト】
<http://www.yuki-eiga.com/>

国内ひろば

JVC network

イベント報告

震災の影響を知り

気仙沼の魅力再発見



■力強い演奏を披露してくれた小々汐打囃子保存会の皆さん。

八月十一日に開催された「第六十二回気仙沼みなとまつり」に合わせてJVCが企画した催しに参加しました。

気仙沼が一望できる安波山で被災状況やJVCの活動内容について説明を受けた後に、鹿折地区で津波で打ち上げられた漁船を見学しました。その大きさを通して改めて押し寄せた津波の大きさを実感できました。この周辺では地盤沈下が発生しており、地盤の嵩上げが終了しないと建物の建設ができません。元のような市街地に戻るまでどのぐらいの年月を待たねばならないのでしょうか？

仮設商店街での昼食後、四ヶ浜に向かい、少子化や震災に伴う生徒数減少により今年三月で閉校となった浦島小学校とその校庭に設けられた仮設住宅を訪問しました。

震災当時に約百名が避難していた鶴ヶ浦の集会所では、住民の方からお話をうかがいました。住民の皆さんが協力しながら苦境を乗り越えた様子がその重みとともにリアルなものとして

伝わってきました。

次はみなとまつりです。三年ぶりに復活した打囃子大競演は迫力のある和太鼓演奏でした。会場への行き

帰りにJVC職員の方が住民の方々に声掛けられ、JVC気仙沼の活動が地域に受け入れられ、信頼されていることが伝わってきました。

最後は住民の方々に交えた花火を見ながらのパーベキューでした。気仙沼ホルモンやカツオの刺身なども振舞われました。その会場はある住民の方の津波で流された自宅が建っていた場所、震災直後の大変な様子もうかがうことができました。

今回の企画は、海や山、まつり、人、ご当地グルメなど、気仙沼の魅力を十分に堪能でき、また、地元の方々の話がたっぷりうかがえる大変有意義なものでした。企画・運営していただいたJVC職員の方々、並びに、お忙しい中お時間を割いていただいた住民の方々に感謝いたします。

（気仙沼事業インターン
横山和夫）

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC 東京事務所

7 月計 626,708 円
8 月計 393,352 円

	7 月	8 月
無指定	5,000 円	40,000 円
タイ	61,000 円	0 円
カンボジア	50,000 円	62,667 円
ラオス	85,000 円	2,000 円
南アフリカ	72,681 円	0 円
パレスチナ	81,480 円	21,813 円
アフガニスタン	62,500 円	16,334 円
コリア	33,000 円	0 円
イラク	40,000 円	1,666 円
スーダン	86,300 円	222,975 円
東日本大震災	49,747 円	25,897 円

※上表には「夏/冬の募金」は算入していません。
夏の募金は右下の欄で集計しています。

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

7 月計 115,600 円 / 13 件
8 月計 46,946 円 / 8 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としができる手軽な募金方法です。

7 月計 2,228,950 円 / 1,921 件
8 月計 2,283,200 円 / 1,927 件

編集後記

会員さんから、会員拡大の提案！というハガキが。「会報を読み終わったら捨てずに友人に渡す。次々にいろいろな人の所に渡って行ったら…楽しい！」。報告はネットで見るからイライラとも言われるこの頃、紙媒体制作チームには何よりの励まし。感謝です。今回は活動を裏で支えてきたコンサートの特集。こんな切り口からの JVC も多くの人が知ってもらいたいです。(テ)

1989 年に東京で始まった JVC 国際協力コンサート
今年 25 周年 (東京)、20 周年 (大阪) を迎えます。

コンサート事務局 石川 朋子



■ 2012 年東京公演。

四半世紀の節目を迎える JVC 国際協力コンサート。今年の指揮者は青木洋也氏 (日本)。JVC 合唱団の創設時より合唱指揮を務め、カウンターテノールの歌手としてまた近年は指揮者としても活躍しています。演目はお馴染みのヘンデル『メサイア』ですが、今年は青木氏が「ぜひこの版を」と選んだ、日本では

あまり演奏されない「1742 年ダブリン初演版に基づく『メサイア』」です。聴きどころは、大阪約 100 名、東京約 250 名の合唱団による迫力と繊細さのバランスがとれた合唱、そしてカウンターテノールのデュエットです。カウンターテノールとして紹介されているのはクリント一人ですが、もう一人は指揮者の青木氏が…。そんな“他では聴けない(見られない)”メサイアを、ぜひ会場でお楽しみください。

【公演情報】

指揮者：青木洋也
ソプラノ：(交渉中)
カウンターテノール：
クリント・ファン・デア・リンデ
テノール：畑儀文
バス：ダニエル・オチョア
管弦楽：テレマン室内オーケストラ

【チケットのお申し込みは】

JVC コンサート事務局へ
電話：03-3836-4108
JVC ウェブサイトでも
ご注文いただけます。

20 周年記念大阪公演

日時：2013 年 12 月 7 日 (土) 15 時開演
会場：いずみホール
演目：G.F. ヘンデル『メサイア』(1742 年ダブリン初演版に基づく / 英語)
合唱：コードリベット・コール

25 周年記念東京公演

日時：2013 年 12 月 14 日 (土) 15 時開演
会場：昭和女子大学人見記念講堂
演目：G.F. ヘンデル『メサイア』(1742 年ダブリン初演版に基づく / 英語)
合唱：JVC 合唱団、Nova Voce、早稲田大学・日本女子大学室内合唱団

2013 年「夏の募金」に
ご協力ありがとうございました！

2013 年「夏の募金」集計 (無指定/郵便振替分：6 月～9 月末)

824 件 7,277,841 円

- ・活動国を指定された募金は上記に含まれません。
- ・上記夏募金の金額は、ページ左上の JVC 募金の欄には含まれていません。
- ・募金額の 20% を管理費とさせていただきます。

JVC ウェブサイト 会員専用パスワード (2013 年 11 月～12 月)：

WuMj9KtBXC

JVC ウェブサイトから T&E のバックナンバーをダウンロードするときには必要です。



JVC CALENDAR 2014 心のお陽さま

写真 安田 菜津紀 Photographs by Natsuki Yasuda



好評
発売中

- 壁掛カレンダー 1,500円
- 卓上カレンダー 1,200円
- ポストカード(8枚組) 600円
- スマイル年賀状(10枚組) 500円

J V C 国際協力カレンダー - 2014

『心のお陽さま』

写真：安田 菜津紀

2014年のカレンダーは、昨年の名取洋之助写真賞を受賞した安田菜津紀氏の協力で制作しました。タイトルは被写体の子どもたちとこのカレンダーをご使用される方々の心に暖かな光がふりそそいでほしいという安田さんの想いから名付けられました。カレンダーの収益は、国内外での支援活動に活用させていただきます。



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉や、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回この会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。入会のお申し込み、会員の方の住所変更などは会員担当の寺西へ。 → s-tera@ngo-jvc.net

会員数 (10月4日現在) 合計 1,141名
(正会員 559名、賛助会員 582名)

■オリエンテーション(説明会)にお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。会場はJVC東京事務所、参加費は無料、予約不要です。

- ◎第1月曜日午後7:00 - 8:30
- ◎第2・第4土曜日午後2:00 - 3:30

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ ウェブサイト

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙90%、間伐材パルプ10%)で作成しました。

